慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	金子芳樹君学位請求論文審査報告
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1993
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.66, No.2 (1993. 2) ,p.157- 166
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19930228-0157

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

金子芳樹君学位請求論文審査報告

一　本論文の目的と意義

本論文は、マレー系人（人口の五九・三％）、華僑・華人（人口の三一・七％）、インド系人（人口の八・四％）という三つの異なる民族集団からなる典型的な多民族国家マレーシアにおいて、相対的に強い経済力を有する一方相対的に弱い政治的立場にある華僑・華人の政治集団に焦点をあてて、その「構造と動態」を明らかにしようとしたものである。そのために、イギリス植民統治下の華僑移民社会の政治化から説き起し、第二次世界大戦後の華人政治集団の結成、マレー人政治集団との対立と協調、一九五七年のマラヤ連邦の独立、華人政治集団の保守と革新への分極化を経て、一九六九年五月一三日の「人種暴動」に至るまでの政治過程を歴史的に分析している。この歴史的分析において、筆者は、マラヤの政治には比較的に無関心であった華僑・華人が、第二次世界大戦後のマラヤの独立に向う過程で、「マラヤの華人」としての政治意識にめざめ、保守と革新を含めてマラヤの政治に積極的に関与していった過程を、華人社会内部の政治対立に即して明らかにしている。「人種暴動」ののちマレー人の政治的優位が強化され、華人の政治的地位は低下しつゝあるが、著者は本論文で、華人が最も政治に積極的であった第二次世界大戦後から一九六九年に至る時期に焦点をあてマレーシアの華人政治の「構造と変動」に迫っている。

この時期は、三つの民族集団の多様な政治的立場を反映した政治集団が噴出し、その協調と対立がマレーシアの政治過程をゆるがした時期でもあった。その意味で、マラヤ、それを引ついだマレーシアの政治が最もダイナミックに動いていた時期を対象として、従来「センシティブ・イシュー」として途上国では研究のためらわれてきた民族問題、とりわけマイノリティ側に立つ華僑・華人の政治集団に焦点を当て、その「構造と変動」を明らかにしようとした意義は大きい。

これまでのわが国のマラヤ・マレーシアの政治研究としては、マレー人の左翼民族主義運動に焦点をあてた長井信一の研究（『現代マレーシア政治研究』、アジア経済研究所、一九七八年）と、三つの民族の言語、宗教、文化の違いと社会・経済における階層関係とイデオロギー対立が交錯する政治的過程を分析した萩原宣之の研究（『マレーシア政治論・複合社会の政治力学』、弘文堂、一九八九年）があるが、本論文は、華僑・華人の政治集団に焦点をあてた最初のまとまった研究であり、わが国のマレーシア研究に新しい分野をつけ加えたものということができる。さらに、著者が一九八七年から九〇年にわたるマラヤ大学留学中フィールド・サーベイを通じてマレーシアに住む多様な

人々の政治意義にふれたこと、とくに華人のうっせきした深層心理にふれたことが本論文の執筆の動機となったことをつけ加えておきたい。

二　構成と内容

本論文の構成は次の如くなっている。

序論
第1章　マレーシア華人政治史序説――独立達成に至る統合と分裂
はじめに
第1節　移民の過程と初期の集団結成
第2節　英植民地統治と中国政治情勢の影響による初期の政治化（一九〇〇―四五年）
第3節　華人社会の政治的組織化――MCAの結成（一九四二―四九年）
第4節　独立達成過程における華人政治（一九五〇―五七年）
第5節　結語――独立達成に至る華人社会の結合と分裂
第2章　マレーシア独立憲法における華人の政治的地位と民族運動
はじめに
第1節　マレー人の特権と華人の既得権益
第2節　華語公用語化問題と華文教育問題
第3節　市民権問題
第4節　マラヤの選挙制度と華人の政治参加
第5節　結語
第3章　独立後の華人政治における路線対立――MCAの内部分裂とUMNOの影響――
はじめに
第1節　憲法制定過程におけるMCA内部対立
第2節　MCA改革派の登場と独立後の内部分裂
第3節　五九年の「連盟」危機とMCA保守派の復活
第4節　MCAの路線対立に与えたUMNOの影響
第5節　結語
第4章　華人政治における保守体制の構造と政策――六〇年代におけるMCA保守派の政治路線――
はじめに
第1節　華人保守体制の構造
第2節　華人保守体制の政治思想
第3節　華人保守体制の経済政策と華人社会の経済発展
第4節　華人保守体制の言語・教育政策と華人社会の対応
第5節　結語
第5章　華人系野党勢力の形成と台頭(1)――マレーシア労働党の政治路線とその

変容――
はじめに
第1節　左翼政治運動の系譜
第2節　労働党の結成とその政治理念
第3節　華人の政治参加の拡大と党内「華文派」の台頭
第4節　党内の路線対立と分裂
第5節　結語
第6章　華人系野党勢力の形成と台頭(2)
――華人系諸野党の政治路線とその影響――
はじめに
第1節　PPP及びUDPの成立と政治路線
第2節　シンガポールの合併と「マレーシア人のマレーシア」
第3節　DAP及びグラカンの政治路線と華人社会への影響
第4節　華人系諸野党間の協調と対立
第5節　結語――一九六九年選挙の結果
第7章　一九六九年「人種暴動」の実態とその政治的意義
はじめに
第1節　「人種暴動」勃発の経緯
第2節　「人種暴動」の実態と華人の認識
第3節　「人種暴動」後の新体制の確立とブミプトラ政策の策定
第4節　「人種暴動」後の華人の対応
第5節　結語
第8章　結論
主要参考文献

先ず第1章の第1節においては、イギリスによるマラヤ半島の植民地開発に必要な労働力として、中国南部から三つの時期に分れて華僑がマラヤ半島に移民したことから書き起している。第一の時期は一九世紀前半のペナン、マラッカ、シンガポールの開発、第二の時期は、一九世紀後半の錫鉱山の開発、第三の時期は、今世紀に入ってからの天然ゴムの開発の時期であった。これら華僑の初期移民のなかには、マレー文化にとけこもうとした「ババ」と呼ばれる人々もいたが、多数は、出身地ごとの「幇(バン)」でまとまり、「会館」や「会党」(秘密結社)をつくっていた。第2節では、これら華僑のなかで、イギリス植民地政治との関係で、植民統治にくみこまれていった「英語派」の指導者と中国の伝統と文化を守ろうとする「華文派」の指導者が生れたとする。他方、中国の政治変動との関係で今世紀に入るとマラヤ、シンガポールに国民党の支部がつくられ、一九二〇年代には南洋共産党(のちにマラヤ共産党)がつくられた。このほか、華人学校、南洋総工会(のちにマラヤ総工会)もつくられ、華人社会内部の階層分化やイデオロギー対立も生れた。第3節では、日本軍政下で抗日戦線を組織したマラヤ共産党が華人社

会内で大幅に支持を拡大し、イギリスの植民地支配の復活ののちも反英ゲリラ闘争を続け、一九四八年マラヤは内戦状態となった。こうしたなか、華僑の「英語派」の指導者とマラヤ総督ガーニーのイニシアティブによって一九四九年一月、マラヤ華人協会（MCA）が結成された。このMCAはその組織化を進める過程で、「華文派」指導者の協力もとりつけ、設立後、八ケ月で一〇万三〇〇〇人の党員を獲得し、華僑の実業家と専門職が指導する政治集団となった。第4節では、このMCAが、マレー人のコミュナルな利益を守るために一九四六年につくられていた統一マレー人国民組織（UMNO）と一九五二年にUMNO＝MCA連合をつくって、同年のクアラルンプール市議会議員選挙で一二議席中九議席をとって勝利を納めた。このUMNO＝MCA連合を中心に対英交渉を通じてマラヤ連邦の独立に向う過程で、マレー人の特権を守ろうとするUMNOに対して、MCAの内部では、UMNOとの妥協を進める「英語派」とこれに反対する「華文派」との対立が生じた。この点について、筆者は、第5節において、華人社会内部の対立の要因として、(1) 政治的オリエンテーション、(2) リーダー間および組織間の対立、(3) 経済的利害の対立の三つを挙げている。

第2章では、一九五七年八月二七日に施行された「一九五七年マラヤ連邦憲法」が民族間の「取り引き」の産物として成立したことを指摘した上で、第1節で、同憲法は、マレー人の特権を認めたものであり、MCAの「英語派」指導者は「やむなし」という立場をとったとする。これに対し、「華文派」はマレー人の特権に反対して民族の平等を主張したとする。第2節では、華語の公用語化と華語学校の法的保証を求める「華文派」に対し、「英語派」は余り関心をもたなかったとしている。第3節では、市民権条項において華僑が不利な取扱いをうけているとしている。第4節では、不利な市民権条項のため華人の政治参加が制約されているとしている。第5節の結語においては、このように華人に不利な条項を含むマラヤ憲法の下で、華人社会内部の「英語派」と「華文派」の対立を軸にマラヤの華人政治が動いてゆくとする。

第3章においては、第1章で、MCA指導者のなかで、「英語派」はイギリス植民地政府および他の民族の「英語派」の指導者との関係を背景に国政レベルに登場したのに対し、「華文派」は同郷および同業組織、華人学校、中華総商会など既存の華人組織の指導者として政治的地位を高めてきたとする。第2節では、一九五八年三月のMCA中央総会での執行部選挙の前に、「英語派」のなかから「改革派」を名のるグループがつくられ、「華文派」の支持もとりつけて、同選挙において、「改革派」のリム・チョンユがMCAの創立者で会長であったタン・チェンロックを八九対六七で破って会長になった経緯に触れている。第3節では、マレー・コミュナリズムを批判し、MCAへの下院議席の割当てを増やし、華語教育を守り、マレー人の特権の現状維持を求めたリム・チョンユのUMNO総裁、

マラヤ連邦首相トウンク・アブドゥル・ラーマン宛て書簡が公開されたことで、UMNOとMCAとの対立が顕在化したが、結果的には、ラーマンとリムの会談で妥協が成立し、「改革派」の主張は実現されなかった。そして、五九年八月の連邦下院議員選挙を前に「保守派」の巻き返しにあってリム・チョンユはMCA会長を辞任し、代って、「保守派」のタン・シュウシンが会長となった。第4節では、このMCA内部の「保守派」と「改革派」の対立に対して、UMNOとくにラーマンが介入し、前者がMCA主流の立場に戻り、このMCAとUMNOが協力を続けてゆくことになった経緯を明らかにしている。第5節の結語では、このMCAの内部対立が、(1) 華人社会の分裂を顕在化させ、(2) MCAを華人の利益の一部を代表する政党へと相対化させたと結論している。

第4章では、「はじめに」で、華人社会は、MCAの保守派指導者を中心にUMNOとの協力を維持しようとする勢力とMCAに挑戦する革新勢力に分極化し、この対立が六〇年代を通じて先鋭化していったとする。第1節では、MCAの政策決定が会長を支持する少数グループによって行われ、党員の構成も商業従事者に加えて労働者、農民が増え、党員の年齢も若返り、「華文派」の党員が増えたことを指摘する。第2節では、MCAの保守派指導者が、UMNOとのギブ・アンド・テイクの関係を維持し、マレー人と華人との橋渡しをすることをその役割と考えていたことを紹介している。第3節では、マラヤ連邦独立後の経済政策の策定に当って、市場原理に基づく自由主義経済を推進したのがMCAの指導者であり、彼等が大蔵・通産両大臣を占めていたとする。このレッセフェールの下で六〇年代を通じて華人の経済は順調に発達し、とくに華人資本家・経営者層が豊かになった。その事例として、筆者は、クオック・ブラザース、ホン・リョン・グループ、タン・チョン・グループ、UMWグループなど七グループを挙げている。第4節では華語教育の維持、マレー語の公用語化に対する対応、華人教育のための独立大学の設立という三つの問題をめぐって六〇年代に華人社会が分裂してゆく過程を明らかにしている。そして、第5節の結語において、(1) 華人中下層がマラヤの政治過程に参入してきたこと、(2) これら中下層には、「華文派」下層を中心とした共産主義者から、都市の「英語派」インテリ中間層に至る多様な層が含まれていること、(3) レッセフェールによって利益を得た少数の華人富裕層と、言語・教育問題に不満をもつ多数の華人という形の分裂が生まれたことを指摘している。

第5章では、UMNO＝MCAの保守連合に対し、華人社会の中下層を中心に、社会主義的立場をとり、マレー人との協調をめざす野党活動が展開されたなかで、六〇年代半ばまで最大の勢力をもっていたマラヤ労働党をとりあげている。同党は、一九五〇年代始めイギリス労働党の下で、ペナン、イポー、クアラルンプール、マラッカなどにつくられた労働党が、一九五四年六月にマラヤ労働党としてまとまったものであった。同党は、

「英語派」インテリ中間層の指導の下で一九五五年七月のマラヤ連邦立法評議会議員選挙に候補をたてたが敗れ、党勢を拡大するために、「華文派」中下層の支持を得るとともに、五七年八月には、マレー人左翼政党であるマラヤ人民党と連合して、マラヤ人民社会主義戦線を結成した。そして、五九年のマラヤ連邦下院議員選挙においては、社会主義戦線として三八人の候補をたて、八人が当選したが、この当選者は一人を除きマラヤ労働党の議員であった。この結果をうけて同党の指導部も「英語派」から「華文派」へと移り、党の路線も急進化してゆくことになった。第4節では、一九六二年の「社会主義者会議」のための労働党のワーキング・ペーパーにおいて同党は植民地主義の遺制を排除して、自由で公正な社会をつくることを主張した。そして、一九六一年のマレーシア結成の提案とインドネシアのマレーシア対決が進むなかで、マラヤ労働党は、マレーシア結成に反対する立場をとり、シンガポールのマレーシア反対派のバリサン・ソシアリスとが連携していった。これらの反対にも拘らず一九六三年九月にマレーシアが結成され、翌六四年四月のマレーシアになってから最初の連邦下院議員選挙が行われたが、マレーシアに反対したマラヤ労働党は二議席をとるに留まった。そして、一九六六年一月、マラヤ人民党との社会主義路線を解消した同党は、「華文派」指導者の下で急進化し、毛沢東主義に基づく新中共・親文革路線を打出し、議会外での活動を始めたため、六八年三月には、「英語派」の指導者は同党を脱退し、同党は急進派のコントロールするものとなったとする。

第6章においては、保守的なMCAと急進化するマラヤ労働党の中間で華人やインド人の利益を守るための野党活動について述べている。第1節では、一九五三年一月、ペラ州のセイロン系タミル人の弁護士のシーニヴァサガム兄弟が結成した人民進歩党（PPP）と一九六二年四年にMCAの「改革派」の指導者であったリム・チョンユがMCAを脱退して結成した統一民主党（UDP）について述べているが、いずれも、その影響は、地域的にペラ州、ペナン州にそれぞれ局限されていたとしている。第2節では、一九六三年九月のマレーシアに加入したシンガポールの人民行動党（PAP）が六四年の下院議員選挙において立候補者をたて、「マレーシア人のためのマレーシア」というスローガンを掲げて選挙運動を行ったためにUMNOとに間で激しい対立を呼び起し、翌六五年八月のシンガポールのマレーシアからの分離独立につながったとしている。第3節では、シンガポールの分離ののち、PAPは六六年三月民主行動党（DAP）と改称してマレーシアで活動を続け、六七年七月には、「スタパッツ宣言」において、民族間の平等と社会的、経済的公正の実現をめざして活動することを明らかにした。ついで、マラヤ労働党を脱退した「英語派」指導者のタン・チークンとUDPを発展的に解消したリム・チョンユがマラヤ大のワン・グンウー、サイド・フセイン・アラタス教授らと協力して六八

年三月に結成したグラカンが議会制民主主義、社会主義的経済政策、多民族協調主義の三大方針に基づいて活動を開始したとしている。第4節では、マラヤ労働党、PPP、DAP、UDP、グラカンなど野党間の協調と対立についてふれている。そして、第5節においては、一九六九年五月一〇日の下院議員選挙において、与党のマラヤ連盟党が八九議席から六六議席に減り、とくにMCAが二七から一三に減ったこと、DAP、グラカンが議席を大きく伸ばしたこと、州議会議員選挙においても、連盟党が二四一議席から一六一議席へと激減したことによってUMNO＝MCA連合に大きなショックを与えたことで結んでいる。

第7章では、この選挙の三日後にクアラルンプールで起った「人種暴動」をとりあげ、第1節で、その原因について考察している。第1に選挙の結果、連邦下院および州議会の双方において、野党のめざましい進出によって、これまでのパワー・バランスが崩れ始めたことである。第二に、選挙二日後の一二日以降、野党のDAP、グラカンの勝利を祝う華人青年が街頭での活動を活発化させてきたことである。第三に、与党のMCAが選挙の敗北の責任をとって、連邦政府、州政府のすべての閣僚職からの辞任を決定したことである。第四に、このような動きに対して、UMNOを支持するマレー人青年が同党の権力維持のために立上ったことである。こうして、五月一三日にクアラルンプールで起った「人種暴動」は一日で収ったが、政府発表によっても死者一九六人、負傷者四三九人の犠牲者を出す流血の惨事であった。この事件について、五ヶ月後に出された政治白書は、事件の原因をマラヤ共産党、華人の過激なコミュナリスト、華人の秘密結社にあるとした。ラーマン首相も、マラヤ共産党の影響をうけた華人の過激な運動だとした。これに対し、華人側は見解を全く異にし、UMNO過激派によるデモ行動が事件の直接の引金であったとみた。とくに、事件の過程で、マレー人の軍・警察が華人に発砲して、死者、負傷者の双方で、華人がそれぞれ七三％、六一・五％と多数を占めていたことから、華人の中に「軍・警察＝マレー人」という恐怖をまき起したとしている。そして、この暴動の結果、マレー人与党のUMNOのなかでは華人系野党に強硬な立場をとる急進派が台頭し、これまでのレセフエールの経済政策に代わって政府の介入を強める方向が強化され、七〇年代以降の、マレー人優先の「ブミプトラ政策」が形成されることになった。これに対し、華人側は、(1) 事件の処理に当ったマレー人の軍・警察への恐怖、(2) 華人系野党の指導者の逮捕、(3) 民族問題についての公的議論の禁止、などのために急速に政治離れを起すことになった。そして、与党の一部を構成してきたMCAの力は弱まり、華人系野党もDAPを除き、反体制的スタンスを取り下げてUMNOとの妥協の方向に向かわざるをえなかったとする。

第8章の結論において著者は、一九五七年のマラヤ連邦の独立から一九六九年の「人種暴動」に至るマレーシア華人社会の

政治過程分析を通じて、MCAとUMNOの連盟党が、当初マレー人と華人の上層の間の妥協による「多極共存型のデモクラシー」の形をとっていたが、六〇年代に、華人の中下層が政治参加を拡大した結果この体制が崩れ始めた。そして、六〇年代を通じて、華人中下層は、(1)「英語派」インテリ中間層を中心に、民主社会主義思想に基づいて民族間の平等を主張する運動（その代表はグラカン）と、(2)「華文派」中下層を中心に、華人の権利の拡大を要求し急進化する運動（その代表はDAP）とが展開され、MCAに対して野党を形成した。しかし、これら野党も、(1)「英語派」と「華文派」の路線対立、(2)支持基盤の地域的分布、(3)指導者間の主導権争いなどのために野党としてまとまることはなかった。にも拘らず華人系野党の力が伸び、一九六九年五月一〇日選挙において議席を拡大させたことは、マレー人社会に危機感を与え、「人種暴動」事件を経て、マレー人優位の政治的再編が進むことになったと結論している。

なお、各章には必要な注がつけられているほか、巻末に、多数の文献目録がつけられており、著者が可能な限りの文献を参照したことが分る。

三　成果と今後の課題

本論文は、前世紀前半から三つの時期に分れて中国南部からマラヤに労働力として流入した華僑が、イギリス植民統治下の移民の時代を経て、第二次世界大戦後に「マラヤの華人」として定着するようになり、マラヤの独立に向う過程で政治集団をつくって積極的に政治に参加して独立の一翼を担い、独立後、多様な政治集団を形成してマラヤ、その後マレーシアの政治を活性化させた政治過程について分析したものである。

その成果として次のような諸点が明らかにされている。

(1)　イギリス植民統治下において英語を学び、その植民地行政にくみこまれた「英語派」と中国の伝統と文化を守ろうとする「華文派」とがつくられ、今日までこの二つの流れが華人社会を貫いてきていること。

(2)　第二次世界大戦後に、「英語派」指導者を中心にMCAがつくられ、UMNOと連合してマラヤ連盟党をつくり、マラヤ連邦の独立の一翼を担ったこと。

(3)　このMCAに、「華文派」の党員が増えたため、同党内部において、UMNOとの妥協を「やむなし」とする「英語派」と、華人の平等な権利を要求する「華文派」との対立が生れたこと。

(4)　こうしたなかで、MCAの「英語派」のなかから華人の権利の拡大を求める「改革派」が生れ、「華文派」と組んで党の指導権を握ったが、UMNOの圧力の下で「改革派」の要求が斥けられ、「保守派」が再び党の指導権を握ったこと。

(5)　このようなMCAの保守化に対して、「華文派」の華人中下層を中心に五〇年代から六〇年代を通じてマラヤ労働党、

人民進歩党、統一民主党、人民行動党（その後　民主行動党）、グラカンといった多数の華人系野党（インドも協力）がつくられ、MCAに対して活発な野党活動を展開したこと。

(6)　一九六九年五月一〇日選挙における華人系野党の進出とこれを抑えようとするUMNOとの対立を背景に起った「人種暴動」について詳細な検討と分析を行ない、この「人種暴動」において、「軍・警察＝マレー人」ということが表面化したため、華人側の抱いた恐怖が華人の政治離れを起し、七〇年代のUMNOの主導によるマレー人優先原理に基づく政治再編をもたらすに至ったこと、などである。

このように本論文は、多民族国家マレーシアにおける華人政治に焦点をあてて、華人社会の「英語派」＝上層＝保守派＝MCA＝UMNOとの協力という潮流に対して、「華文派」＝中下層＝革新派＝野党＝UMNOとの対立という潮流の二つの対立の図式とそのバリエーションによって華人政治を歴史的・構造的に分析したものであって、マレーシアの政治研究に新しい大きな貢献をもたらしたものということができる。

最後に本論文に残された今後の課題についてふれておく。

(1)　多民族国家マレーシアのなかの華人政治をとりあげた研究であるので、著者の留学体験をふまえて、マレー人と華人の間の宗教、文化、価値観、生活様式などの違いや相互認識などについて、またマレー人側の華人に対する政治的対応について、もう少しつっこんだ分析が期待される。それにより、華人・マレー人側双方を含む政治過程のダイナミズムがより明白にされるものと思われる。

(2)　華人社会の研究であるので、幇の規制は崩れてきているとはいえ、それぞれの華人政党における幇の分布との関連について分析すれば、より興味深いものとなる。また華人政治を考える場合、移民の時期や世代や居住地や職業の違いなどがどのような影響を与えているかということも興味あるところである。

(3)　さらに今後の課題として、「人種暴動」後のマレー人優先のブミプトラ政策の下でUMNO指導の政党再編成が進められたなかで、華人政党がどのように変化していったかについて、七〇年代から今日まで二〇年間の華人政治の研究の継続を期待したい。

(4)　その際に、政治学、社会学を中心に近年活発に展開されている民族、エスニック集団研究の概念や考え方を積極的に利用することが望まれる。それによって、先進国で専ら発達したこれらの研究の発展途上国への適応性の検証、反証に大きな貢献をなしうることが考えられ、本研究は単にマレーシアの多文化社会の政治過程を明らかにするにとどまらず、学問的により大きな成果につながるものと思われるからである。

四　総合評価

金子芳樹君が提出した学位請求論文「現代マレーシア華人政治の構造と動態」は、多民族国家マレーシアにおけるマイノリ

ティの華人政治に焦点をあてて、移民から「マラヤの華人」となり、マラヤの独立からマレーシアの成立を経て、一九六九年の「人種対立」事件に至るまでの与野党にわたる華人の政党政治がつくりだした政治過程を歴史的、構造的に分析したもので、わが国のマレーシア政治研究に新しい分野をつけ加えたものということができる。先に述べたごとく今後になおいくつかの研究課題を残してはいるが、華人政治の立場からマレーシア政治の二〇年にわたる構造と変動を見事に明らかにした本論文の成果を評価して、同君に法学博士（慶應義塾大学）の学位を授与するのを適当と認めるものである。

平成四年七月八日

主査　慶應義塾大学法学部教授　法学博士　松本　三郎
副査　獨協大学法学部教授　法学博士　萩原　宜之
副査　慶應義塾大学法学部教授　社会学博士　関根　政美